

至近距離で聴く天才　ーヘイ・ザ・サロンコンサートと岡田博美さんー

平松幸治（名古屋・平松内科クリニック院長）

2006年10月15日夜、博美さんと後援会の方々を乗せた車を見送りホッと胸を撫で下ろしたが、頭の中では数時間前の拍手の嵐がまだざわめいていた。

今回で33回目のヘイ・ザ・サロン　ここまでよく続いたと思う。
車と人生には、アソビが必要とはよく言ったものだが、クリニックの完成時、アソビがこんなに大きくて大丈夫か？と自問自答した記憶が蘇る。設計者のM氏と大喧嘩しなければクリニックにホールはなかった。契約後はパタッと姿を見せなくなったM氏に設計事務所を変えると私が噛みついたのだ。一転してM氏は、細部にいたるまで全力を尽くしてくださり、親しくなった。そして私との共通する音楽の話題が興じて、平屋のクリニックだけでは、面白くない、屋根裏ホールを作ろうということになってしまった。（ちなみにM氏のご令嬢は桐朋音大ピアノ科卒）

ピアノもまた、こだわるM氏の目に留まるものが国内になく、ヨーロッパでハンブルグスタンウェイの出物が見つかった時には建物は完成し、すでに私は診療を始めていた。M氏はそのピアノを自身のポケットマネーでクリニックの2階の窓枠を壊してクレーンで強引に搬入したという伝説を持っている。

さて、コンサートのご報告である。2年前に博美さんに初めてご来場いただいた時もリハーサルの段階ですでに全身鳥肌の感動で、冷静に司会進行役が出来なかった覚えがあるが、またしても同じ轍を踏むとは！？それだけ、至近距離で聴く天才のかもしれない出す音は威力があった。観客の半分は、クリニックの患者さんであり、クラシック通はごく一部の人だけだったが、眠る人はもちろん皆無、バッハ、モーツァルト、矢代秋雄、リストと次第に瞳が大きくなり背骨の前傾は徐々に強くなっていった。プログラムを終え、アンコールを求める拍手は、誰もが「時間よ、ここで止まってくれ」と祈っているようにも聞こえた。ほんとうに至福のひと時であった。

心身医療の一環として始めたこのコンサート。いくら録音技術が進みDVDで音と映像同時に楽しむことができたとしても、人はそれに拍手をしない。博美さんの演奏は、強烈に人々の脳を変化させたに違いない。皆、来場された時とは別人のように歓喜で頬を紅潮させて帰っていかれた。

コンサート後、博美さんの演奏に心奪われたM氏はおっしゃった。
「ねえ先生、今度岡田さんがいらっしゃるまでにホールを階段席にしましょうよ！」と。
「・・・」